

わたしの「学歴無用論」

koberyo1

我々の代には「腹が立つ」という言葉があった。現在は「キレル」というのだそうだ。学校で長時間、辛抱できない生徒。欲しいものを汗水垂らして働いてやっとのことで手に入れる醍醐味を知らない子どもたち。辛抱も忍耐も知らず、ましてや自らに打ち克つよろこびも知らない子どもたちがいま、大量に育っている。

やがてそのような子どもが大人になり、また新たな子どもが誕生するのだ。この国は驕のなっていない子どもたちであふれかえるだろう。まことに怖ろしい世の中になってしまったものだと思う。

なぜ、このような世の中になってしまったのだろうか。

戦前のことだが、当時明治憲法下での偉大な力がわたしたちを規定し、コモンセンスをしらずしらずのうちに形成していたと思う。いわば、空気となっていたのだった。

たとえば教育勅語の教えがわれわれの生活に自然にしみこんできていた。してはいけないことは修身で学んだし、その場の空気ですごく実感されたものである。

いまは親を大切にすることなど、ご先祖様を崇拝することなど、頭の隅にひとかけらもないほどである。また教育であるが、「学ぶ」ということについても、自力で掴みとる、ということをしらず、どうも受け身になってしまっているようなのだ。本を読まないということも著しく増えた。教養ということは一切、無視されている。

いま思い起こせば太平洋戦争が終わってから、がらりと日本の教育が変化した。教育勅語に変わるものとして、昭和22年、11カ条からなる教育基本法が制定された。

日本は占領下にあったので、主権が事実上なかった。時の法律によって、その法律が戦後の今の時代に適合しているか、あらためて問い直す時期にきているかと思う。

現行法が間違っているといっているのではない。すなわち日本の教育は何を目指しているのか、そしていかなる日本人をつくらうとしているのかが、今後新たに問われてくると思うのである。

日本人は戦後、年寄りを家族で守るといった美風や驕など、国の基本ともなる大事なものを捨て去ってきたのではないだろうか？

煎じ詰めれば、教育基本法を子どもの教育のことだけではなく、社会全体のこととしてとらえなければならないのである。

「藤田東湖の母」や「野口英世の母」に代表されるように、家族教育が教育の基本であり、親が学校の先生に範をしめし、すべての親がこの世の中では子どもに対して一番影響力をもった人でなければならないのだ。

学校でイジメられ、社会が悪いとか、TVの影響があるとかいうが、わたしが思うにはやはり家庭の荒廃がおおきな理由かと思う。

戦前は義務教育は六年間だった。このモラトリアムの期間、これで自分の向き不向きなどの適性を判断したり、将来や目的を決めてきた。高い月謝を払って大学に行くのはなぜか？

小理屈を知るだけで大学に行ってしまうと、人生の目的や方向性がわからず、大学を卒業したのに自分の理想と合致せず、二、三年で入社した会社を退職してしまう人が少なくない。ここから自分の目標を求めてさまよいはじめる。

自分の理想にあった会社などあるはずはない。ようするに苦しみ抜いた者だけが、生きる道を掴むことができるだけだ。問題は単純なのに、むつかしいことをいって自分を正当化している。会社は利益を生産しない者は必要ないのである。利益を上げない者に、どうして月給を払わなければならないのだろう。また統制上、秩序やルールを守らない人はいらないのである。

またわたしが憂慮しているのは日本の技術力の低下である。この技術力が年々、低下し、ものづくり日本のイメージが弱くなりつつあると思うのだ。

技術者の育成に取り組むために早期に、そして長期に「徒弟制度」を再興する必要がある。国が現在、実行しているものに「職業訓練校」的制度を実施しているものの、これを若いうちからもっと叩き直すための躰教育を重視した「徒弟制度」的要素の導入が大切だと思う。

終戦間際、海軍の飛行訓練の練習生の教官がいなかったのは多くの戦没者のため、訓練可能な先生がいなかったからである。教育というのは時間とコストがかかるのを肝に命じなければならない。